

日本女子大学人間社会学部教育学科・教育学科の会共催

ホームカミングデイ・日女祭同日企画 講演会

必見！平成の伊能忠敬に聞く

— 遊びの中の教育的意義 —

Japan Women's University Symposium:

A Views on Learning and Playing of Children in Japan

11st October 2018

齋藤慶子、谷川彰英、大谷洋貴、藤田武志、田中雅文

Keiko Saito, Akihide Tanikawa, Hiroki Otani, Takeshi Fujita, Masafumi Tanaka

執筆協力者（「プロジェクト実践演習Ⅱ」受講生）

稲垣朋香、越智彩美、河井菜々子、川畑聡子、志摩めぐみ、須藤理帆、並木梨瑛、西澤めばえ、畠山結衣、愛知真菜美、荒川佳穂、岡部聖、木下直子、國井真那、酒元日菜子、下沢あす花、鈴木理紗、関口美花、高橋佳那、中村萌華、藤岡美帆、藤本笑里、堀水真世、吉田汐里、渡辺加奈子、渡邊理沙

2018年10月11日（木）に開催された谷川彰英氏の講演会「必見！平成の伊能忠敬に聞く—遊びの中の教育的意義—」は、平日の夕方にもかかわらず45名もの参加者があり、盛会なものとなった。以下に、講演会の記録（要約）を記す。紙面構成の都合上、内容や順番を編集している。また、谷川彰英氏の発言部分は〔谷川氏〕、教育学科教員については〔〇〇T〕と記す。そのほか、学生の発言部分については〔司会〕〔アシスタントA／B〕〔質問学生〕、卒業生及び一般参加者の発言部分は〔質問者〕とする。なお、本報告書の表記において、講演記録（Ⅰ～Ⅳ章）は口語としているが、それ以外の章は、文語・常体に統一している。

Ⅰ. 講演会の趣旨

1. 開会挨拶・配布資料及び注意事項等

〔司会〕必見！平成の伊能忠敬に聞く—遊びの中の教育的意義—講演会にお越しいただき、誠にありがとうございます。本日の司会進行は教育学科3年次中村萌華と私、堀水真世が務めます。どうぞよろしくお願い致します。

講演開始に先立ちまして、2点ご確認をお願い致します。1点目は携帯電話・スマートフォンの確認です。電源を切るか、マナーモードに設定した上で、講演中はスマートフォンを利用されないようご協力お願い致します。スマートフォンを利用してしまうと、本日の講演の面白さが半減してしまいます。2点目は資料の確認です。お手元に受付でお渡しした、パワーポイントの資料、谷川先生のご略歴・ご著書の一覧、講演会の参加者アンケートの3点があるか今一度ご確認お願いします。講演会の参加者アンケートはお帰りの際に出口の回収ボックスにお入れください。

2. 講演会趣旨

〔齋藤T〕皆さんこんにちは。今日はあまり天気が良くない中お越し頂きありがとうございます。お帰りの頃に、雨が降らなければ良いなと思っております。2時間にわたる谷川先生のご講演を、ぜひご堪能ください。

私からは、この講演会の趣旨・目的についてお話しさせていただきます。本講演会は、教育学科専門科目「プロジェクト実践演習Ⅱ」を履修している2～3

年生の学生によって企画・運営されています。大学の建学の精神である「自学自動」の学びを展開するということが授業目的として、講演会の企画立案、事前準備、そして当日の運営を行っております。受付でお配りしたブックカバーも、受講学生が原画のデザインを行い、制作会社の方と素材や制作費用などに関する打ち合わせをしながら作成したものです。ブックカバーの袖のデザインには、「だるまん」の大きな絵が書かれていますが、それ以外にも全体に「子ども」とか「おもちゃ」とか、日本を象徴する富士山などが描かれています。これらの絵は、本日の講演会のコンセプトを基に描いているものですので、ブックカバーの絵の意味をお考え頂きながら講演をお聞き頂くのも楽しみ方の一つかと思えます。

この「プロジェクト実践演習Ⅱ」の授業は、2年前から実施しております。2年前は、クリアファイルを作成しました。今年度のブックカバーにしてもクリアファイルにしても、教育学科の同窓会である「教育学科の会」に非常にお世話になり、ご協力いただきながら作成しております。本日の講演会も、教育学科の会・教育学科の共催ということで運営させていただいております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

このように授業の一環の講演会であるという趣旨をご理解いただいたうえで、ここから先の学生の進行による講演会を温かいお気持ちでお見守りいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 人間社会研究科長挨拶

〔今井 T〕 こんにちは、今井と申します。教育学科の教員で、人間社会研究科長をしています。今日は谷川先生、お忙しい中、遠く西生田の地まで足を運んで頂きありがとうございます。「教育学科の会」の皆様、ご援助ありがとうございます。この講演会は、齋藤先生がおっしゃったように「プロジェクト実践演習Ⅱ」という授業で、齋藤先生の甚大なサポートのもと行われていますが、今日のような講演会に辿り着き大変良かったと思います。

今日の講演会タイトル「平成の伊能忠敬に聞く」。これは、教育学科の学生が考えたなかなか面白いキャッチフレーズだだと思います。私は谷川先生に

については社会科教育の大家として存じあげていたのですが、最近はテレビに出演されたり、地名の問題、また漫画についても研究しておられて。昨年度の私のゼミ生の卒論で、マンガ教育についてというテーマを掲げた学生がおりまして、彼女が一番最初に参考にしたのが谷川先生の本でした。本当に幅広い研究をされているんだと思います。

この講演会は「プロジェクト実践演習Ⅱ」で、いわゆるアクティブラーニング科目として行われていますが、私はアクティブラーニングに若干の批判を持っております。ただ単に活動しているだけでは学びはないだろう、何を学ぶか、その内容が重要なのではないかと考えています。その点、今回は谷川先生という素晴らしいコンテンツをお持ちの方を発見し、齋藤先生の筑波大学時代の恩師という関係もあって、この素晴らしい先生をお招きすることができて、嬉しく思っています。今日はよろしくお願いいたします。

4. 講師紹介

〔司会〕 本日お話ししていただく講師、谷川彰英先生について簡単ではありますが、私よりご経歴を紹介させていただきます。谷川彰英先生は1945年8月、長野県松本市に生まれ、松本深志高等学校をご卒業後、現在の筑波大学の前身である東京教育大学の教育学部に進学され、同大学大学院博士課程を修了されました。柳田国男の思想研究で教育学博士の学位を取得されています。千葉大学助教授を経て、筑波大学教授、理事、副学長を歴任され、現在、筑波大学名誉教授でいらっしゃいます。また、谷川先生は日本社会科教育学会、日本生活科・総合的学習教育学会などの学会の会長も歴任されています。このように日本の教育界を長年にわたり牽引されている谷川先生ですが、定年退職と同時にノンフィクション作家に転身され、現在は地名に関する多くの著書を執筆されているだけでなく、テレビやラジオにも出演され、現在も多方面でご活躍されています。それでは谷川彰英先生、お願いします。

Ⅱ. 講演「必見！平成の伊能忠敬に聞く —遊びの中の教育的意義—」

1. はじめに

【谷川氏】 みなさん、こんにちは。この話は7月頃に頂いたんですけど、その当時講演できるかなって思いました。去年まで元気だったんですけど、今年ちょっと体調を崩して。今日は、途中水飲みながら、色々ゆっくりやりますのでお付き合いいただけたらと思います。皆さんにはパワーポイントの資料を3枚分お配りしたんですが、休憩の後、また追加で資料を配ります。とりあえず休憩までに、ここまで話を持っていけたらなあと思います。

「伊能忠敬」、皆さんご存知だとは思うんですけど、まさか僕が「伊能忠敬」に見られるなんてことは思ってもいませんでした。日本史の中の大変重要な人ですよ。伊能忠敬は51歳のときに家督を譲って、千葉県の佐原から江戸に出て天文学を学んで日本地図を作った人物。その経歴がね、若干私に近いかなというのはあるかもしれない。僕が筑波大の教員をやっていたのは、63歳まででした。著書のリストもあるらしいですが、退職した前後から地名の本が多く出ています。自分でも何冊書いたかわからないけれど、確かに年取ってから「地名」というのは、ちょっと遅かったかなとも思います。そのことを説明するためには若干私のプロフィールをお話なくてはならない。

2. 私のプロフィール

(1) 小学校時代（故郷／地図大好き少年）

【谷川氏】 今日の講演会は、私が喋る量を減らすために、対話風にやろうかと思っています。私の卒業した高校の卒業生が教育学科にいるとのことなので、彼女に来てもらって話をしたいと思います。

【アシスタント A】 教育学科2年の西澤めばえと申します。私も谷川先生と同じく長野県松本深志高等学校の卒業生です。よろしくお願いします。

【谷川氏】 高校の後輩です。小・中は全然違うんですけどね。さて、この写真の中に小学生の頃の僕を探して？（アシスタント学生が写真の中の谷川先生と思われる少年を指さすと・・・）近いけど違うなあ、そこにいる「いい男」、それが僕。5年生のとき。昭和20年生まれだから昭和30年くらいの写



写真1：谷川氏講演

真。ここに古い校舎もあって。歴史的に言うと、当時の日本は戦後教育改革のころで、経験主義に基づく新しい教育の時代で、勉強しなかった時代です。もっぱら野山を駆け巡って遊んでいた。それが「生きる力」を育てる。まあ、そんな時代だったんです。

僕は曹洞宗の徳運寺というお寺に生まれたのです。これは、この後の話との関係で重要なことです。そして地図大好き少年だった。僕の持論、小学校の4年生くらいで子どもは変わっていくんです。これは教育民俗学の話。民俗学っていうのはエスノロジーじゃなくてフォークロア。たとえば、赤ちゃんとか、幼稚園の子に How old are you? って聞いた場合、それはどういう意味？

【アシスタント A】 ^{なんさい}何歳ですか？

【谷川氏】 ^{なんさい}何歳ですか？って幼稚園の子に聞く？いくつ？だよな。^{なんさい}何歳？って聞かないよね、幼稚園の子に。歳って聞くのは何歳から？

【アシスタント A】 小学生に上がったあたりですか？

【谷川氏】 違う。あなたはいくつ？ふたつ、みつつ、よつつ、いつつ、むつつ…。10歳になって、大人は初めて子どもに「^{なんさい}あなた何歳？」って聞く。これ重要。てことは、10歳が、幼児から一人前の子どもになっていくのに大切な時機だというだということがわかる。

実際、4年生前後ね、女の子はちょっと違うけど、男の子の場合は特別な世界に興味を持っていく。例えば、虫・星・釣りとか。そういう世界に入り込んでいく。「ピアグループ」といって、子どもたちが群れを成していく。3年生くらいから、子どもの行

動力は広がっていきます。親と一緒にだったのが、子ども同士で遊ぶようになる。ただ、自転車に乗って遊びに行く。10歳ころから12歳に何に興味を持ったかが、その子の一生に影響する。

例えば、手塚治虫先生は虫大好き少年だった。僕が親友として付き合ってきた矢口高雄先生も、やはり小学校の時に釣りや昆虫集めに夢中になって、『釣りキチ三平』を描いた。ということになってくると、実は、僕も地図大好き少年になったのが小学校5年生だったということには意味がある。誰かの強制によって地図を見るとか、教科書を開くんじゃダメなんです。僕は地図が好きだったけど、誰からも言われたことはない。ただ純粋に地図帳が面白かった。だからその当時の地図帳をほとんど覚えています。当時地図帳に載っていた人口、名古屋130万、神戸80万、京都150万、東京850万。全部覚えてるわけです、それは自分が好きでやっていたから。

（写真資料を示しながら一執筆者註）これが僕の田舎なんですけど、これなんて山？

【アシスタント学生A】わかんないです。

【谷川氏】まあ、西澤さんは松本市じゃなくて塩尻市らしいから許すけど、美ヶ原って山です。大学3年生のときに田舎に帰って、この山のふもとに住んでいたという、あるおじいさんと出会う。そのおじいさんは、僕が6年間ずっと不思議に思っていたあることを解決してくれた。それは家から学校までのバス道路に、交差するように小さな道があって、どこを通っても家まで帰れんだけど、なんでこんな道があるの？っていう「不思議」だった。それが、そのおじいさんの説明でわかった。交差する小道は昔の道、いつも通る道はバイパスで新しくできたバス通り。その一言はまさに、目からうろこだった。地域の歴史を学習することの大切さ面白さに、大学になってから気づいた。当時、まだ大学で、ドイツの教育学を勉強しているところで。そういうのが実は、その後に影響していく・・・。

（2）松本深志高校（ドイツ語履修／高校教育への疑問と教育学を志す契機）

【谷川氏】さてそれじゃあ、高等学校に行きます。これは高校2、3年生のころにクラスマッチをして優勝した時の写真。じゃあ僕はどれ？僕の隣にはい

つも女性がいる。（会場、笑い）

ちなみに、この時のクラス会を、たまたま昨日（2018年10月10日）、甲府でやったんです。その同級生の中の一人が、日本女子大の教育学科の卒業生で。しかも、不思議な縁で、その同級生の紹介で、日本女子大の児童教育学科で心理学を学んでいた学生と私は結婚することになりました。

さて、松本深志高校の話に戻って、高校時代にドイツ語を履修したっていうのも、その後の僕の人生の一つのポイントなんです。当時、ドイツ語をやっていた高校は、日本全国そう多くはなかった。僕自身は大学入試もドイツ語、だから大学に入ってから英語力はひどくて、英語の先生をびっくりさせてしまった。教員から指名されて英語を読んだ。その時、'a kind of'（ア カインド オブ）「種類の」っていうのを、ドイツ語発音で「ア キント オブ」って読んじゃった。ドイツ語では、'Kind' は「キント」って発音して、「子ども」って意味なんだ。複数になると 'Kinder'（キントラー）。幼稚園 'kindergarden' って意味とかね。その英語教師は、僕を睨みつけるようにして「君は、本当に教育大に入ったのか」って言いましたね。でもしょうがない、高校時代にドイツ語も英語もどっちもやっているから。

実は、この高校時代にいわゆる受験勉強への疑問が生まれました。なぜ、こんなくだらない勉強をしなくてはならないの？ってことを、ずっと思うようになりました。僕自身の成績はそう悪くはなかったけど、なんでこんなやりたくもない、こっちは学ぼうとも思っていないことをやらなくてはいけなんだろう、っていう矛盾を感じていた。そして僕は、「教育学を改革してやろう！」と、松本深志高校の時に決めたんです。

松本深志高校は少し変わったところで、西澤さんも感じていたかもしれないけどどんなところが変わっていた？

【アシスタントA】松本深志高校は非常に自治の精神を重んじる学校でした。制服もなく、これといった校則もなく、何をしてもいい自由な校風でした。一つ、上履きと外履きを区別するようにと言われたことはあるんですけど、それ以外は本当に自由な校風でした。

【谷川氏】元々松本には旧制松本高校という学校が

あって、いわば昔の古い意味での教育が残っていたんです。当時の学風は、バンカラ精神だった、北杜夫とかね。

3. 欧米から日本へ

(1) 欧米の影響を受けた教育学

①東京教育大の教育学講座／欧米教育学の影響

【谷川氏】 その頃の東京教育大学の教育学講座は13講座あったんだ。

私にとって1番大きな出会いは梅根悟先生との出会い。この人は西洋教育史の専門なんですけど、1年生の時のクラス担任でした。先生の授業で『原典教育学』っていうのをやって、妻も日本女子大学で使ったそうです。村山貞雄先生は、日本女子大学の先生だったんだけど、卒業生の皆さんはご存知ですか？（会場の卒業生から、「知らないです」と応答）。

戦後の日本は、「戦争で負けた」から、あらゆる意味でコンプレックスをもっていた。そういうこともあって、特に欧米、特にアメリカ、デューイとか、そういうアメリカの教育指導の影響、欧米教育学の影響を、ものすごく日本の教育は受けていた。先ほどのお話で、今もアクティブラーニングというものがあることが出てきたけど、当時も、そういう風に横文字をいれてくるような時代だったわけですね。デューイに象徴される経験主義という考え方は、子どもの活動や経験をもとにして教育を考えるとというものだった。これは、ある意味で、僕にとっては救いだったんですね。受験勉強ってのは、子どもの経験とか関心とかと関係なく、やらされるものですから。もともと、そこに疑問をもつ経験をして教育学を志したから、欧米の教育学に親しみをもって入り込めたわけです。

(2) 「日本」の教育への回帰

【アシスタント B】 (1) ドイツへの遊学。1967年3月から9月、卒論の単位だけを残し、ドイツを中心にヨーロッパ遊学。(2) 「神様がみているから...」

【谷川氏】 僕はドイツに憧れていましたから、大学に入ってから3年間ぐらいずっとドイツに行っていたって思いがあったんです。当時はね、留学の

制度が1つしかなくて、でも最後に落とされて。それじゃあ自分で行こうって決めて、お金を貯めて、半年間、ドイツに行ったんです。

ドイツに行くまでは、本当に何の疑いもなく、ドイツの教育学をやっていたんです。ところが、ある日、訪問した小学校で、小さな女の子、たぶん小学校1年か2年ぐらいの子どもと一緒に歩いたときに、その女の子が「私は、悪いことはしない。」って言うんです。「なんで？」と聞いたら、「神様はいつもわたしのことを見てくださっているから。」って。

これはもう雷が落ちたみたいな衝撃でしたね。つまり、僕には分からなかった。だって、僕は禅宗の仏教徒だもん。わかるわけがない。またわかろうとも思わなかった。「神」っていう概念は僕の中には存在してない。で、多くの日本人もそうなんです。

その後、ドイツからヒッチハイクでヨーロッパを周遊した時の話です。ドイツ人の学生に拾われて、彼と数時間「神とは何ぞや」って議論したんですよ。ドイツ人の学生がね、ある日突然、「神様の声が聞こえた」っていうんですよ。僕は、それを聞いて、「一体、どんな声でどんな大きさで、どこから聞こえたの？」って、当時は思ったの。いや、実はそんなことはでないわけですね、信じている人には。で、朝まで議論して、最後「物質とは何か」に辿り着いて、もうやめようやってなったわけです。

ただ、このとき、初めて分かったことがあった。彼らは、「分からないものを神と呼ぶんだ」って言ったんです。そうか、それまで僕は、ヨーロッパで自然科学が発達することとキリスト教とは矛盾していると思っていた。でも、そうではないんだって分かった。つまり、科学の概念で説明しきれない「人知を超えた何か」が宗教であり、そうした超越的な「わからないもの」を、彼らは「神」と呼んでいるんだって気がついたんだ。

そういう経験をしながら、僕は半年間ヨーロッパにいたんですよ。どこへいってもキリスト教の「神」。どこの美術館に行ってもキリスト教の絵。科学の概念では説明できないものを背景としたキリスト教に関わる「神」や絵画は、僕には理解しきれない。例えば、こうしたキリスト教という背景をもつ子どもたちに道徳をどう教える？日本人が教えられるのか。ベスタロッチの作品だって、ベースにある

のは全部キリスト教なんだよ。

僕は、だんだん分かったかのように、自己流に解釈して半年間をドイツで過ごしたけど、本当に分かっていたかという、やっぱり分からなかったんだと思う。つまり宗教ってのはそれほど深いってことを、ドイツを中心としたヨーロッパ遊学で体感してきました。

（3）柳田国男の発見

〔谷川氏〕僕は日本に帰ってきて何をしようかと考えました。もう、欧米教育はやれないと思ったときに、柳田国男を発見した。柳田国男は、東大出てから、農商務省に入って高等官僚として農村がいかに疲弊してるかという実情にふれるうちに、民俗的なものへの関心を深めていったんです。ここに柳田国男が、民俗学者でありながら、教育に対しても非常に良い功績を残していったポイントがある。そこに僕は目をつけて、長く研究に励んでいくことになったんです。

（4）柳田教育論を読む

〔アシスタント B〕柳田教育論を読む

（1）柳田学の教育的性格。学問は何のために行うか？人々の幸せのために貢献することだ。「経世済民」の思想。

（2）「近代の学校教育」批判。「明治前の日本に〈教育〉はなかったのか？」。

〔アシスタント B〕歴史教育への批判と期待。

「文字の教科書などは1つもない時代から、家庭では長老と立てられる人々が、何かの折を捉えては古い話をして聴かせる。多くは切れ切れの小部面の問題であったが、次々と積み重ねまた総合して行くうちに、おのずから時代というものの観念がこれによって得られたので、これがまた学校創立以前の、たった1つの歴史教育の方法であった。そういう老人の話を1もなく2もなく、頭から若い者が馬鹿にするような気風のはじまったのも、言わば新たな機関に対する信頼からであった。そんなくどくどしい年寄の話などを聴かずとも、学校で立派に教えてくれるからよいという考えが先に立っている。だから学校の責任は非常に重い。ほんのいい加減な型に嵌まった学ばせ方をしてはおられぬわけである」（柳田国男「歴史教育の話」）

〔谷川氏〕明治になってから「教育は学校でやる」って、みんな思っちゃったんですね。学校なんかできる前は、老人の話を聴きながら子どもは育ったんです。学校制度が始まってからは、「学校の人（教師）がやってくれる」という風になっちゃった。つまり、柳田が言いたかったのは、明治前の日本には「教育はなかった」というけど、それは学校で行われる型に嵌った「教育」がなかったということであつた。実際は、学校なんかできる前から、日本には子どもを育む教育はあったんだということなんです。

今日の講演のテーマである「前代の遊び」というのは、その学校なんかなかった時代から、すでに子どもは「いっぱい学んでましたよ」、「いっぱい色々なことを学習してましたよ」ということを考えていくものなんです。

4. 前代の遊び

（1）遊戯（かごめかごめ／かくれんぼ）

〔谷川氏〕それじゃあ、遊戯、かごめかごめ。歌ってくれる？

〔アシスタント B〕かごめ かごめ 籠の中の鳥は
いついつ出やる 夜明けのぼんに 鶴と亀がつべった
うしろの正面だアレ♪

〔谷川氏〕すごいね、歌ってくれた。（会場、拍手）
「かごめかごめ」って、「後ろの正面」って言い方だって、矛盾してるよね？面白い話だよ。これは、「あてっこ遊び」なんだよ。「あてっこ遊び」ってのはすごく重要で、見える世界から見えない世界を推測するゲームなの。これ、実をいうとね、日本の遊びに共通していることなんだよ。例えば、「いないいないばあ」っていうのは、見える世界から見えない世界を推測するわけですよ。こうした遊びは、人間の科学的思考力を広げるのに、どれほど役に立ったか。

「だるまさんがころんだ」、やったことある？「だるまさんがころんだ」も、見えない世界から見える世界へ動きを逆に推測してるでしょ？しかも、これ僕の発見なんだけど、この遊びは十進法なんだよ。「だるまさんがころんだ」は、10文字だよ。知らないうちに、遊びの中で「10」という感覚を培っているんだよ。これはすごいよ。知らないうちに、10という数を語呂合わせしている。

(2) ことば遊び (かるた／しりとり遊び)

〔谷川氏〕次、かるた。これは、ひらがなをだす内容。1回試しにやってみようか。「あさひ きらきら アンパンマン」。つまり、「あ」という平仮名と、それに即した内容がくっついて言葉の中に入っていく。もちろん分かるね。しりとり遊びは、語彙力を増やす意味があるんだ。あれをやっていると、どんどん語彙が増える。そしたら国語の授業なんかじゃないよね。

昔々から読んでくれる？

〔アシスタント B〕「昔々ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました」

(1)「昔々」は自在に使い分けることが可能であり、「今」と「昔」との関係をとらえていくのが本来の歴史教育である。

(2)「ある所」も同じ論理であり、「ここ」と「そこ」をどうとらえるかが本来の地理教育である。

〔谷川氏〕「昔々」ってのは、どうにでもなる。何年って決まってないんだもん。昔ね、火事があったときとか、じいちゃんがまだ若かったころとかね。そういうようなこと。自由でいいんですよ。だから、「ある所」もいい加減だね。だって、北海道でも九州でも神奈川県でも、どこでも使える。ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。そして子どもたちが... て考えたら自分のもっともっと前の...って勝手に想像している。

(3) まねごと遊び (ままごと／チャンバラ／「学ぶ」の語源は「まねぶ」から／傍観傍聴主義)

〔谷川氏〕「ままごと」は、漢字で「飯事」という字です。「ご飯を作ること」が、すなわち「ままごと」。

日本語の「学ぶ」という言葉は、「まねぶ」からきている。「まねぶ」というのは「模倣」です。心理学的にも「模倣」っていうのは、学習方法では1番ですね。どんなことも「まねる」ところから、学習が始まる。子どもたちは遊びが全部「まね」じゃないですか。何度も何度もまねていくなかで、それが段々とレベルアップしていったって、一人前のレベルへなっていく。

最後は、「傍観傍聴主義」。傍らで観て、傍らで聞

く。昔の子どもってというのは、単なる遊びじゃなくって、農作業を手伝わされることが多かったです。「稲を刈れ」、「麦をとれ」、「草をとれ」、「縄をはれ」、「草鞋をつくれ」って。そういうのを見ながら聞きながら自然に覚えていったんです。

でも、考えてみたら、今の学校教育ってのはね、そういうのがないんだよね。先生がいつもここにいる、生徒に教えてあげる。ところがね、傍観傍聴主義ってのは違う。現代なら、どの世界に残っている？たとえば、職人の世界。寿司屋なんて3年かかる。魚をさばくのだって、傍観傍聴主義。職人っていうのは見ながら聞きながら、そこでステップアップしていくんだよ。それは学校にはない。考えてみたら、これすごく大切。そういう発想は今の学校教育でも生かしていくべきなんじゃないかな。

(4) 子供組

〔アシスタント B〕子供組。「正月小屋の中では、おかしいほどまじめなこどもの自治が行われていた。あるいは年長者のすることを模倣せたのかももしれねが、その年十五になった者を親玉または大将と呼び、以下順つぎに名と役目がある」(柳田国男『子ども風土記』)

〔谷川氏〕これはね、僕らの世代が最後だったんですよ。西澤さん、「さんくろう」って知ってる？ちょっと説明して。

〔アシスタント A〕はい。「さんくろう」は、繭玉を各家庭で作って、大きい火をおこしたところに、枝につけた繭玉を火にくべて焼いて食べるという行事です。

〔谷川氏〕ぶっぶー。そういうことはやるけど、いわゆる小正月といって1月15日にやる、門松とか全部集めてやる「どんと焼き」のことなんです。松本周辺では、それを「さんくろう」と呼んでいます。「三九郎」。これは正月の門松だけでなく色々なを集めて焼くから、その時に繭玉も火にくべて「繭玉を食べたら元気になるよ」という話になるんだ。

正月小屋というのは、田んぼや空き地に、竹や木、藁、茅、杉の葉などを組んで作った小屋のことで、そこに正月飾りや注連縄や書初めなんかを積み上げて燃やす。それを僕ら世代までは、子どもが取

り仕切ってやっていたんです。中学3年生の15歳の子が親方、その親方の指示に従って、松を切ってきて小屋を作るって、そこに火をつける。火の中にくべた餅を食べながらこどもは遊ぶんです。それが、昭和30～40年ぐらいから、子どもの「火遊びは悪い遊び」だっていうことになって、学校が禁止にしちゃったんです。でも、子ども組というのは、本来、大人は入っちゃいけない。全部子どもが率先してするんです。そういう組織がまだ僕らのころにはあったんです。ここには、親や教師は入れない。子どもだけの文化だったんです。ということで第一部終わりにします。

5. 「なぜ」と「ことわざ」

〔谷川氏〕 後半はさっきの倍くらい盛り上げますので、よろしくお願いします。後半はね、この辺の学生さんに小学校6年生になってもらいます。模擬授業風にやります。

僕ね、毎年、あちこちで何回も授業しているんですよ。その時ね、初めて出会う子どもたちや先生の緊張感を取り除くのに、めっちゃいい方法がある。どういうのかっていうと、担任の先生から名簿をもらってくる。それで、今日は皆さんの名簿がここにあります。普通、学級担任はルビを振ったものをくれます。平仮名や片仮名。それを全部消してもらって、僕が子どもの名前を読んでみるんです。まだ君たちの名前は分かりやすい。今の子どもたちは、わけがわからない。今の子どもたちと比べれば、みんなのは一目で分かるよね。「せきぐち」さん。「ひろたろうこ」さん。読めちゃうなあ。「ふじおかみほ」さん。これは読めない…「おかべきよ」…「さとう」…あとはね、「ふじもとえり」さん。

〔学生〕 えみりです。

〔谷川氏〕 えみり？そう僕の友人でね、自分の子どもに「エミル」って名前をつけた人がいた。「エミル」ってのは、ちょっとどうかなと思ったけど、「えみり」はいい名前だね。それから、「おちあやみ」さん、当たってる？

〔学生〕 はい

〔谷川氏〕 当たるとね、子どもは拍手するんだ。

会場（拍手）

〔谷川氏〕 あとは読めるなあ。はい、それで、これ



写真2：模擬授業形式の講演風景

からは、なぜとことわざの方にいきます。

今回はクイズで出題しますから。グループどうなってるかな。手上げてください。1班、2班、3班、4班、5班、6班。沢山正解の出たグループには僕からのプレゼントがあるかもしれない。（会場、笑い）多分あると思います！

(1) なぜ

〔アシスタント B〕 なぜ。

「ともかくも国語の力、言葉のはたらきがどれほどまで大きいかということ、なぜというものによって初めて知った者は多かったのである。同じ一つの物でも事でも毎日私たちが言い表している形のほかに、もっとおもしろくまたは美しく、少し考えてみてそれからわかるような言い方が、あったことに心づいたのは、文芸の芽生えといってもよい。」（柳田国男『なぜとことわざ』）

〔谷川氏〕 柳田国男さんって人は凄い文学的センスがある人なので、ちょっと回りくどい言い方をしています。

さて、「一つ目小僧に足一本、な一んぞ」。はい、グループごと相談して何だか当ててください。ちなみに、「なぜ」という言葉は「なんぞ」ということからきてます。ヒントは、これの「なぜ」は、柳田国男がいた頃だから、相当昔に作られたものだっていうこと。今から100年以上、昔。目が一つあって、足が一本しかない、細長いものです。分かった？

〔学生〕 街灯？

〔谷川氏〕 おお、いいかもね。いいんじゃないそれ。

一つ目小僧、ああいいね。正解にしちゃってもいいね。そういうの素晴らしい。本当は違うけどね。本当は、めちゃめちゃ小さいもの。

【学生】小さいもの？

【谷川氏】学生さんいいですよ。6年生ってね、あまり考えないの。もっと手挙げる。

【学生】待ち針？待ち針ですか？あ…マッチ？マッチ棒！？

【谷川氏】ああ、待ち針も一つ目小僧だし。マッチ棒いいかもね。でも違う。だんだん長さが近づいてきたね。

【学生】針？

【谷川氏】当たり～！じゃあ、とりあえず5班が1ポイント！

じゃあ次の質問。「百軒長屋に釜一つなんぞ」お釜は、ゆでるお釜のことね。百軒長屋、百軒は多いかな、十軒くらいかな。今でも、田舎に行ったときに、所々で観光者用に時々見ることはできるよ。分かったグループは手を挙げてね。

【学生】機関車？

【谷川氏】まあいいでしょうね。汽車！10両編成の汽車（十軒長屋）の燃料を一つのボイラー（釜）に入れることを意味しているんだよね。

こういうのは子ども同士で掛け合う、ここに意味があってね。子どもが考えてそれを解くの。「一つ目小僧に足一本」というのも、自分が映像としてイメージする世界が、何を指しているのかを当てる遊び方なんだ。これは子どもが一番賢くなる。

(2) 三段なぞ

【谷川氏】さあ、次は三段なぞ。「葬式とかけて鶯ととく」、その心を考えてみてください。これは、葬式も知っているけど、鶯も知っている。その2つに共通する言葉を当てるゲーム。相当、高度な問題です。もうできたところあるかな。この問題は、全グループに前に出て示してもらおう。

（写真挿入：各班の代表者が回答を書いたボードを手前に並んでいる写真）

【1班・学生】葬式とかけて鶯ととく。その心はどちらもなきます。

【2班・学生】葬式とかけて鶯ととく。その心はどちらもなくものです。

【谷川氏】本当を言うとさ正解はそれでいいだけ

どね・・・、じゃあ3班。

【3班・学生】葬式とかけて鶯ととく。その心はホーホケキョ（法華経）。

【谷川氏】あー、法華経。こういうのもあるね。じゃあ4班

【4班・学生】葬式とかけて鶯ととく。その心は法華経です。すぐぱっと思いついたのがこれです。

【5班・学生】葬式とかけて鶯ととく。その心はどちらもなくものです。

【6班・学生】葬式とかけて鶯ととく。その心はなくでしょう。

【谷川氏】じゃあ正解を出して。（スライドに答えが映る）「泣（鳴）き泣（鳴）き埋め（梅）に行く」

【学生たち】えー！（会場がどよめく）

【谷川氏】だから、ああいう風に持ってくると大正解で、「なく」のが一緒っていう点と、「うめ」にくっという点の共通点だよね。どうしましょう。なくだけで正解にする？じゃあそうしましょう！（会場、拍手）ということで、正解したのは1, 2, 5, 6班です。

次は、僕が作った問題です。「夫婦とかけて、こじらせた風邪ととく」、その心は？さあ考えて。難しいよ、これは。（会場の学生たちが、ざわざわと相談をする）もうギブ？もうわからない？「葬式」と「鶯」ってね、普通絶対分らないけど、さすが日本女子大だよ。あ！君らは女子大生じゃなかった、小学校6年生か（笑）じゃあ、もうギブアップかな・・・。あ！はい1班。分かったところで言ってみて。

【1班・学生】どちらも咳（籍）をする…？

【谷川氏】すごいねえ、6年生とは思えない。でもそれ意外といいかも！他はでるかな？

じゃあ僕の正解を言います。「夫婦とかけてこじらせた風邪ととく」、その心は「熱が冷めても、咳（籍）が抜けない」すごいでしょ、これ。よし、正解にしよう。1ポイント。

(3) ことわざ

【アシスタント B】「ことわざはなぞのようにはっきりと指すものがない。文句全体を覚えてよく味わってみないと、その真の価値は分からない。したがってこれは若い人たちが自分で作ることをせず、たいていは年取った者の言っていたのを記憶していて、自分もやや年を取ってから後に、適当な場合にはそのまま使ってみたり、または少しずつ新しいのを作ってみたりするのである。」（柳田国男『なぞとことわざ』）

【谷川氏】ことわざというのは、大人がいろいろ経験して重ねていって、格言みたいに教訓みたいに残していったもので、実はここにも前代の技があります。「花より団子」っていうことわざは、「花」と「団子」っていう目に見える世界から、その言葉の背後にある意味（風流よりも実益）を語っている。

全てではないけれど、今日話した言葉あそびの論理というのは、見える世界から見えない世界を推測するということ。それが一貫しているわけですよ、遊びの中に。

例えば、これは難しいよ。這うってわかる？赤ちゃんが這うとか。「這っても、黒豆」。これも分かりやすく説明すると、多分分かると思うんだ。

ちょっと司会の中村さんと堀水さん、二人とも前に来て。ここに黒い物体が置いてある。中村さんは黒い虫だと思っている。堀水さんは黒い豆だと思っている。でも、そのうちに、その黒い物体が這い始めた。這っても、堀水さんは絶対に黒い豆だと言っている。這ったら豆じゃないことは分かっているけど、豆じゃないって認めたら負けだから、言い張るんだ。そういう頑固頭、あるいは純粋さを揶揄したことわざなんだ。

(4) ことわざ教育

【アシスタント B】「ぼくは、妹のケシゴムをおっちゃんからおなじのをお母さんにかけてきてもらおうと思って、「立っている者は親でも使え」だから買ってきてと言いました。そうしたら、お母さんが、「そのあと知ってる？」と言いました。「なんだろな」と思って聞いたら、「○○○○」と言いました。「お母さん、よく知ってるな」と思ってびっくりしました。ぼくは、自分で買うことにしました。（NHK ラジオ『はなしことば』講座）

【谷川氏】お母さんが切り返してきた「○○○○」。ちょっと分かんないかな？そこにはね、「まして、子ならなお使え」って入るんだよ。そして、「『お母さん、よく知ってるな』と思ってびっくりしました。ぼくは、自分で買うことにしました。」という風に、言葉のやり取りで人間の心は、真逆にも翻っていくんだよ。

6. 日本列島おもしろ地名

(1) なぜ平成の伊能忠敬か？

【谷川氏】私がなぜ、伊能忠敬なのか。学生さん説明をよろしくお願いします。

【学生】題名にある伊能忠敬は自らの足で測量し、日本地図を作成しました。谷川先生の本を拝見したところ、日本の地名や駅名の謎を解き明かしている本を多く執筆されていて、両者とも日本の土地に関連した謎を解き明かしているという共通点から、この題名をつけました。また、年をとってから天文学を学び、地図作りをした伊能忠敬の生き方と、お年を召されてから大学を辞め、地名歩きを始められた谷川先生の生き方が似ていると思いましたのでこの題名をつけさせていただきました。

【谷川氏】はい、大変光栄です。

ちょっと今から5枚スライドをお見せします。スライドで出てくる地名を読んでください。

（スライド1）^{けち}鶏知（長崎県対馬市）。神功皇后三韓征討の際、道に迷ったが、夜明けに鶏の声に助けられたという。」

【谷川氏】これ、対馬という所です。中学校が鶏知（けち）中学校。小学校は鶏鳴（けいめい）小学校。鶏知というのは、鶏が知らせる、伝承です。それでは、2つ目のスライド。

（スライド2）^{はげ}半家（高知県四万十市）。平家の落人伝説。→実際は「崖」の意味。

【谷川氏】「はげ」って読めた人いる？この半家（はげ）は面白い。これはね、平家の平の一文字を下げたんだ。そもそも、「はけ」とか「はげ」というのは崖という意味なんです。

(スライド3) 向津具 (むかつく (山口県長門市)。長門国大津郡「向国 (むかつくに)」。向津具小学校、向津具中学校。

【谷川氏】 はい。(この後1分ほど音声が途切れているため、初校の際に追記)

(スライド4) 飛鳥 (奈良県明日香村)。枕詞「飛ぶ鳥の明日香」。「飛ぶ鳥」はどこにいる？ 龍王山・三輪山・巻向山 (スライドには写真あり)

【谷川氏】 この写真に写っている鳥は何に見えますか？ この中に鳥がいるの。

【学生】 山の形が羽を広げている鳥のようだなと思います。

【谷川氏】 6年生にしてはちょっと予習しすぎ。どういう格好に広げてる？ ちょっと格好してみて。正解！ 今から十何年前に寺が崩壊して、〇〇〇〇。これは日本で最も古い神社と言われている三輪山、三輪神社。

(スライド5) 吉里吉里 (岩手県大槌町)。井上ひさし『吉里吉里人』(1981年)。アイヌ語「砂浜」。

【谷川氏】 これはOGの方は知ってますよね。きりきりです。「きりきり」っていうのは砂浜の音なんだ。

(2) 柳田国男の地名論

【アシスタントB】 「柳田国男の地名論。地名とはそもそも何であるか」というと、要するに二人以上の人の間に共同に使用せらるる符号である。中略。最初の出発点は、地名は我々の生活上の必要に基づいてつけられたものであるからには、必ず一つの意味をもち、それがまた当該土地の事情性質を、少なくともできた当座には、言い表していただろうという推測である。官吏や領主の個人的決定によって、通用を強いられていた場合は別だが、普通にはたとえ誰から言い始めても、他の多数者が同意をしてくれなければ地名にはならない。親がわが子に名を付けるのとはちがって、自然に発生した地名は始めから社会の暗黙の議決を経ている。」(柳田国男『地名の研究』)

【谷川氏】 人の名前つけるのは勝手です。だけど、例えば、宮崎美子さんの場合だったら「美しい恋したい」と思って美子って名前にした」とか、そういう期待を持って人は名前をつける。でも、地名の場合は勝手につけちゃ駄目。周りの人が納得しなきゃいけないっていうことを、柳田は言っているんだ。

7. 「遊び」とは何？

(1) 子どもの遊びの教育的意義

「遊ぶ」→「実生活に煩わされず物事を楽しむ。好きな事をして楽しむ。」(『岩波 国語辞典』)
子どもの遊びの教育的意義。

- ① 自主的かつ自由な行動であるだけに没頭・集中できる。
- ② 現実世界を超えた想像の世界で個性的な形象が創出できる。
- ③ 自分たちのルールやマナーに従って行うので、相互規範能力が育つ。
- ④ 偶然性・競争性・秘密性があることで、楽しむことができる。

【谷川氏】 自分たちのやってきた遊びを振り返ってみると、自主的とか、自由な行動とか、想像性のカギ。勝手な想像で遊べるじゃん。先生はいないし、自分たちのルールでやるし、競争もあるしね。子どもの遊びっていうのは、とても重要です。でも最近それがね、子どもの遊びの世界が狭まっちゃってる。みんな英語。幼稚園でも英語ばっかだよ。なんかね、遊べていない。

(2) 地名の世界でも遊ぶ

地名の世界でも古人が遊んだ面白い例がいくつもある。

- ① 「十八女」(徳島県) ② 「十八成浜」(宮城県)
- ③ 「男女川」(茨城県)

【谷川氏】 地名の世界でもね、遊び。1番は十八女さかり。これも平家の落人伝説で、壇ノ浦で負けた平氏が徳島に逃げてきた。安徳天皇が入水せずに落ち延びたのが十八女であるという説があるんです。2番は十八成浜くぐなりはま。18で9+9、きゅう、く、なり、十八成。3番は男女みなの川。男女が合わせているから。みんなだから。

こういう風に日本の文化の中には非常に自由に遊んで、ゆったりと楽しんでいる世界があって、学問も実は非常にレベルの高い遊びなんです。生活のために、明日の飯のためにやる仕事とは違う。今日の話の一番大切なこと。学芸で遊べ。学問で遊べ。食うだけじゃ何もない。やっぱり知的な好奇心、そういうものを培っていくためには、子どもの遊びっていうのはとても大事なもののなのです。

Ⅲ. 質疑応答（平成の伊能忠敬に聞け！）

【司会】平成の伊能忠敬である谷川先生、とても興味深いお話をありがとうございました。ここで会場の皆様から質問の時間を設けたいと思います。ご質問のある方は挙手をお願いします。

【質問・学生 A】興味深いお話ありがとうございました。最近、ゲームで遊んでいる子どもが多く多いと思うのですが、ゲームで遊ぶ子どもは成長することができると思いますか。また、ゲームで遊んでいる子どもたちを成長するためにはどんな風にアプローチしていく必要があるとお考えですか。

【谷川氏】僕もね、ゲームの世界は分からないんだけど、所詮人様が作ったルールで遊んでいるだけを感じる。昔の遊びっていうのは自分たちでルールを作った。遊びを通して。それを、自分で作ったルールに従って遊んでいると意味がある。他人の人様の作ったルールに乗っかっているだけ。まずいよね、0歳児からやっているもんね。絶対に、あれじゃあコミュニケーション能力が育たない。一番良いのは赤ちゃんに対しての「いないいないばあ」。これは直接教えられる。だからね、ゲームはなるべく触らせないようにしている。

【質問者・学生 B】講演の冒頭でも少し道德の話が出たと思うんですけど、次期学習指導要領で道德が成績評価の対象の教科目になるって、よくテレビとかでも言っています。今、ここにいるほとんどの学生が教育学科の学生で教員志望なので、もし何かアドバイスなどがあったら教えていただきたいです。

【谷川氏】道德はね、いかに難しいかっていうのはさ、「神様がみてるから」っていう子どもたちを考えたら分かるけど、そう簡単にはいかないって思うんだ。だけど、何か今、結局昔から言われていたこと、友情とか親とか兄弟とか、徳目の一つとしては悪くないです。ただね、価値が対立するっていうことを前提としていないね。だから、非常に危うい。危険だと思う。例えば、10項目の徳目的な部分があったとする。7つか8つは国が決めても良いけど、あとの2・3個は「それを全う出来れば良いよ」っていう風にやったらよっぽどね、颯爽としてスマートな道德が出来たって思うんですよ。今、道德、道德っていうけれども、市民教育というのがあって、市民として社会と密接に繋がっているんだよね。今の色んな教育を文科省が一生懸命やっているのは良いんだけど、それに批判的ではないよね。ちょっと答えになっているか分からないけど。

【質問者・一般／卒業生】最近なんですけれども、孫を見るようになりまして、「こどもチャレンジ」など、子どものしつけまで映像で判断するようになってきているんですよね。私たちの時代は、人のことを見て学んで成長していくことが多かったと思うんですけれども。今は、映像を見てこういう風にトイレトレーニングをしたら、こういう風に何かを覚えるとか、こういう風に公園デビューをしたら、全部決まった型で教えているような感じがするんですね。そういうのを見てみると型破りな人間が出来ていかないんじゃないか、お利口さんばかりが出来上がっていくような気がします。子どもと一緒にベネッセの教育のを見ていても、同じものを形成していく感じがするんです。自分で自然に身につけていく、自然に好きなものを好きになっていくというのが大切だから、現代のビデオとか映像に頼っていても良いのかな、やはり言葉遊びやしりとりをすることによって想像力を増やしていく教育をする方が良いんじゃないかなっていうことを強く感じました。質問というより感想だったんですけど、よろしくお願い致します。

【谷川氏】昔はね、子どもの文化があった。親が入れない、教師も入れない。子どもたちで自発してい

く文化というのがあって、そういう中で培った能力というのがすごい。今は、0歳児から親とかベネッセみたいなものが介入している。ほとんど言葉を構成しちゃうじゃないですか。ビデオとかネットが生きているみたいに。ちょっとやばいと思う。どうして良いのか分からないけれども。

Ⅳ. 御礼の挨拶

〔司会〕教育学科長の藤田武志先生よりご挨拶をいただきます。藤田先生よろしく願いいたします。
〔藤田 T〕谷川先生、今日はどうもありがとうございます。色んなことを学ばせていただきました。特に印象に残ったことは、子どもたちの生活の中の色んなところに教育の機会がたくさん埋め込まれているということです。そういうことを今日のお話から学んだように思います。おじいちゃんのお話とか、言葉遊びですとか、あるいは子ども同士の関係とか遊びとか、そういったことの中で子どもが育つ。かつては、そうした沢山のものが生活の中に散りばめられていたのが、学校制度が発達し、社会が発達することによって、むしろそれが分断され、無くなってしまったということに改めて気づかされたように思います。うちの娘は10歳なんですけれど、よく「ごっこ遊び」をしているんですね。自分たちでルールを作りながら、自分たちが楽しいようにやっていく姿こそが、「生きる力」を培っているんだということを感じました。これからも極力邪魔をしないようにしていこうと思います。

そして、私の研究室には谷川先生の漫画の本もあります。いつもはテレビを通して拝見している谷川先生に直接お会いしてお話を聞き、色んなところに私たちが育つ契機を見出す谷川先生を見習って、色んなところに嗅覚を働かせる必要を感じました。皆さんも是非そういうところを見習っていただければと思います。今日は本当に遅くまでお忙しい中ありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願い致します。

〔司会〕最後に受講生を代表しまして、教育学科3年次、藤本笑里よりお礼の言葉を述べさせていただきます。

〔学生〕本日はお忙しい中、遊びの中の教育的意義というとても興味深いご講演をどうもありがとうございました。

ございました。谷川先生のお話を伺う前までは、教育は学校や教師があってこそのものだと思っていたのですが、今日のお話を聞いて、子どもだけの遊びの中でも国語や算数を学ぶことができるし、大人がやっていることを見て聞いて真似るだけでも子どもは多くのことを学べるんだ、ということを知って、そこがすごく衝撃的でした。グループに分かれての謎の解き合いも、自然と白熱してしまっすぎて楽しかったです。最後になりますが、今回の講演は私たち大学生でもよく分かる内容で、とても参考になりました。これからは谷川先生の講演内容を踏まえて、教育実習とか子どもとの関わりに生かしていき、勉学に励んでいこうと思います。本日は本当にありがとうございました。これでお礼の挨拶とさせていただきます。

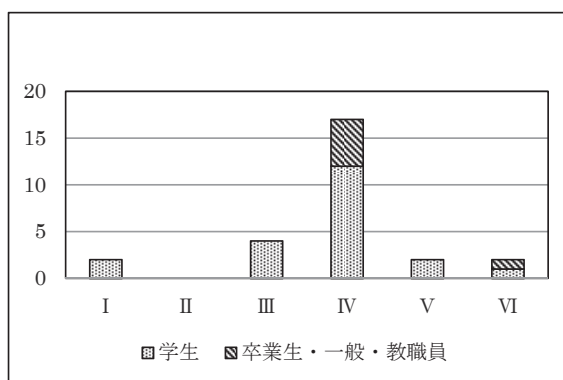
Ⅴ. 講演参加者アンケート

講演会参加者に対して、任意のアンケートを実施し、25名から回答を得た。本章では、アンケート結果を基に、本講演会参加者の「教育」や「遊び」に関する意識の変容をみていく。

アンケートでは、まず、講演内容（Ⅰ. 谷川先生のプロフィール、Ⅱ. 欧米から日本へ、Ⅲ. 前代の遊び、Ⅳ. 「なぜ」と「ことわざ」、Ⅴ. 日本列島おもしろ地名、Ⅵ. 「遊び」とは何か？）の中で、最も興味深かったテーマについて尋ねた。（図表1）に示すように、「Ⅳ. 『なぜ』と『ことわざ』」に最も興味・関心を抱いた参加者が17名と、圧倒的多数を占める結果となった。「Ⅳ. 『なぜ』と『ことわざ』」は、講演参加者の学生を「小学生役」に見立て、模擬授業形式で実際になぞ解きの「遊び」をしながら、「見える世界から見えない世界を推測する」という言葉遊びの論理を理解していく体験型の講演内容であった。このテーマへの興味・関心の高さは、「教育や遊びに関する新たなイメージ」を、自由記述で具体的に尋ねた問への回答にも確認することができる（図表2、参照）。

さらにアンケートでは、谷川氏の講演のなかで「印象に残ったキーワード」を、自由記述方式（複数回答可）で尋ねた（図表3、参照）。ここからも、「『なぜ』と『ことわざ』」で体験的に学んだ「見える世界からみえない世界」へというワードへの関心

【図表 1】興味深かったテーマ（人数）



【図表 2】教育や遊びに対する新たなイメージ

遊びは学びに繋がる。
「遊び」から教育的なことも沢山学ぶことが出来るということが、沢山の実体験を踏まえて分かることができた。
見えるものと見えないものがあって、それを考えることで育まれるものがある。
小さい頃、遊びとしていたことが学びに繋がっていて教育的価値があったことに気づかされました。
ことば遊びが教育につながるというのは、新しい発見でした。この方法なら、子どもは楽しみながら学ぶことが出来ると感じました。
学問を楽しみながらできるということが素晴らしいと思いました。ことわざやなぞなぞで子どもたちの想像力や科学的思考が育まれていくんだなと思いました。

【図表 3】印象に残ったワード

印象に残ったワード	人数
見える世界から見えない世界	8 人
子どもの興味関心は 10 歳頃から	5 人
子ども文化・子供組・子どもだけの世界	3 人
「学ぶ」は「まねぶ」	2 人
だるまさんがころんだ	2 人
地名、鶏知・半家などの地名	2 人
自主性	2 人
傍聴傍観主義的教育	2 人
遊び、遊びから学べ	1 人
教育は学校のみで行うものなのか？	1 人

の高さが窺える。また、数は少ないが、「子ども文化・子供組・子どもだけの世界」「だるまさんがころんだ」などの前近代の子ども文化や「前代の遊び」に関するワード、「遊びから学べ」「学ぶはまねぶ」など前近代の子どもたちの「教育」と「遊び」

の往還的な関係性を指すワード、前近代の子どもたちと大人の関係性を示す「傍聴傍観主義」といったワードも挙がっている。その一方で、近代以降の「学校教育＝教育」という考え方に疑義を挟む「教育は学校のみで行うものなのか？」を印象に残った

ワードとして挙げる回答も見られた。これらの回答は、講演内容が、講演者の抱いていた「学校教育＝教育」という考え方を揺さぶり、子どもにとっての「遊び」の意味や日本土着の「子ども文化」の教育的意義への気づきに繋がったことを示している。

最後に、講演会への感想を自由記述で尋ねた。「教育」と「遊び」に関する「遊びと教育的意義の密接な関係を知ることができ、とても勉強になった。」といった回答や、「前代の遊び」や「子ども文化」から子どもの教育・成長・発達について捉えている「横文字が多い日本の教育を学ぶ中で、昔遊びや昔の文化から見る子どもの教育・成長について考えることができ、とても勉強になりました。」と

いった回答のほかに、体験型・参加型の講演会形式についての感想も散見された。たとえば、「参加型の講演会で楽しかったです。」「学生さん達への模擬授業が盛り上がり、楽しかったです。」「大変中身の濃いお話を楽しく対話的に伺うことが出来ました。」といった回答が挙げられる。

以上のアンケート結果は、プロジェクト実践演習Ⅱにおいて谷川氏と学生・教員とが対話的に企画を練り実施した本講演会が、講演参加者の「教育」や「遊び」に対する深い意識変容に影響を与えたことを示しており、このことは、「社会に開かれた学び」としてプロジェクト実践演習Ⅱが機能していることの証左であるとする。



写真3：講演会終了後の全体写真

